

『資本論』 第1部 資本の生産過程

〈要約:紅林進〉

第3篇 絶対的剰余価値の生産

第9章 剰余価値率と剰余価値量

剰余価値総額に関する3つの法則

第1の法則:生産される剰余価値の総量、前貸しされた可変資本の量に剰余価値率を掛けたものに等しい。言い換えれば、それは、同じ資本家によって同時に搾取される労働力の数と、個々の労働力の搾取率との複比によって規定されている。

$$\frac{m}{v} \times V$$

M =

$$k \times \frac{a'}{a} \times n$$

M: 剰余価値量

m: 1人の労働者が平均して1日に引き渡す剰余価値

v: 1個の労働力の蚊入れに毎日前貸しされる可変資本

V: 可変資本の総額

a: 必要労働

a': 剰余労働

第2の法則:労働日の延長で剰余価値の総量を増やすのには、1日24時間以内という絶対的な限界がある。

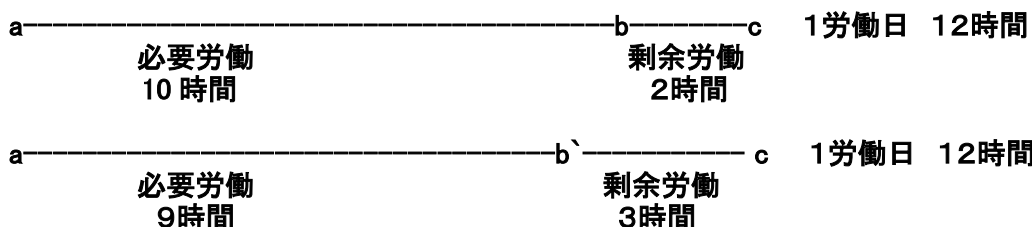
第3の法則:剰余価値率が与えられており、労働力の価値が与えられていれば、生産される剰余価値の総量は、前貸しされる可変資本の大きさに正比例する。

貨幣が資本に転化するには、一定額が必要であり、最小限度がある。その最小限度額は、資本主義的生産の発展段階が違えば違っており、与えられた発展段階にあっても、生産部面が違えば、その部面の特殊な技術的諸条件によっても違っている。単なる量的な変化が、ある点で質的な相違に一変するという、ヘーゲルがその論理学の中で明らかにしている法則が正しいことがここでも証明される。

生産過程を価値増殖過程の観点から考察すると、生産手段はたちまち他人の労働力を吸収するための手段に転化する。もはや労働者が生産手段を使うのではなく、生産手段が労働者を使うのである。このような資本主義的生産に特有な、死んでいる労働と生きている労働との、価値と価値創造力との関係の逆転が起こる。

第4篇 相対的剰余価値の生産

第10章 相対的剰余価値の概念



絶対的剰余価値:労働日の延長によって生産される剰余価値

相対的剰余価値:必要労働時間の短縮とそれに対応する労働日の両成分の大きさの割合の変化とから生ずる剰余価値

特別剰余価値:個別資本家が、労働の生産力を上げて、その商品の社会的価値よりも安い個別的価値で生産できるようになると、社会的価値との差額を特別剰余価値として取得できる。個別資本は、この特別剰余価値を求めて、労働の生産力を上げようとする。しかしこの新しい生産方法が普及すると、その商品の社会的価値自体が下がり、特別剰余価値は消滅する。個別資本は更なる特別剰余価値を求めて、更に生産性を上げようとする。このような生産力の上昇が、必要生活手段の生産部門を捉えたとき、必要生活手段によって再生産される労働力の価値を引き下げ、相対的剰余価値を上昇させる。

商品の価値は労働の生産力に反比例する。労働力の価値も、諸商品の価値によって規定されているので、同様である。

これに反して、**相対的剰余価値は労働の生産力に正比例する。**

商品を安くするために、そして商品を安くすることによって**労働者そのものを安くするために、労働の生産力を高くしようとするのは、資本の内的な衝動であり、不断の傾向なのである。**

労働の生産力の発展による労働の節約は、資本主義的生産では決して労働日の短縮を目的としてはいないのである。それは、ただ、ある一定の商品量の生産に必要な労働時間の短縮を目的としているだけである。

第11章 協業

協業:同じ生産過程で、または同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの人々が計画的に一緒に協力して労働するという労働形態。

協業の効果

- ① 労働者の個人的差異が相殺されて平均化する。
- ② 生産手段の共同使用による節約とそれにとまなう商品価値の低下。
- ③ 集団力としての生産力の創造。
- ④ 社会的接触が競争心や活力の独特な刺激を生み出して、各人の個別的作業能力を高める。
- ⑤ リレー作業のような共同作業や多方面からの同時作業による生産力のアップ。
- ⑥ 一定の労働成果が達成されなければならない決定的瞬間に発揮される、適時の多数の結合労働の効果。
- ⑦ 労働の空間範囲の拡張や縮小を可能にする。

生産手段の節約は二重の観点から考察されなければならない。

- ① この節約が商品を安くし、またそうすることによって労働力の価値を低下させる限りで。
- ② それが、前貸し総資本に対する、すなわち総資本お普遍成分と可変成分との価値総額に対する剰余価値の割合を変化させる限りで。(この点は、第3部の第1篇で初めて論究される。)

結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力なのである。この生産力は協業そのものから生ずる。他人との計画的な協働の中では、労働者は彼の個体的な限界を脱け出て彼の**種族能力(類的能力)**を発揮するのである。

多数の賃金労働者の協業が発展するに連れて、**資本の指揮**は、労働過程そのものの遂行のための必要条件に、一つの現実の生産条件に、発展してくる。

すべての比較的大規模な直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少なかれ一つの指図を必要とするのであって、これによって個別的諸活動の調和が媒介され、生産体の独立な諸器官の運動とは違った生産体全体の運動から生ずる一般的諸機能が果たされるのである。単独のバイオリン演奏者は自分自身を指揮するが、一つの**オーケストラは指揮者を必要とする**。この指揮や監督や媒介の機能は、資本に従属する労働が協業的になれば、資本の機能になる。資本の独自の機能として、指揮の機能は独自の性格を持つことになる。

資本家の指揮は、社会的労働過程の性質から生じて資本家に属する一つの特別な機能であるだけでなく、同時にまた一つの**社会的労働過程の搾取の機能**でもあり、したがって搾取者とその搾取材料との不可避的な敵対によって必然的にされているのである。

資本家の指揮は内容から見れば二重的であって、それは、指揮される生産過程そのものが、一面では生産物の生産のための社会的な労働過程であり、多面では資本の価値増殖過程であるという、その二重性によるものであるが、この指揮は形態から見れば**専制的**である。

いっそう大規模な協業の発展につれて、この専制はその特有な諸形態を展開する。

資本家は、個々の労働者や労働者群そのものを絶えず直接に監督する機能を再び一つの特別な種類の賃金労働者に譲り渡す。一つの軍隊が仕官や下士官を必要とするように、同じ資本の指揮の下で協働する一つの労働者集団は、労働過程で資本の名によって指揮する**産業士官(支配人)**や**産業下士官(職工長)**を必要とする。

資本家は、産業の指揮者だから資本家になのではなく、彼は資本家だから産業の司令官になるのである。

協業の単純な姿そのものは、そのいっそう発展した諸形態と並んで特殊な形態として現れる
とはいえ、協業そのものはつねに資本主義的生産様式の基本形態なのである。

第12章 分業とマニュファクチュア

第1節 マニュファクチュアの二重の起源

分業に基づく協業は、マニュファクチュアにおいてその古典的な姿を身につける。マニュファクチュアが資本主義的生産過程の特徴的な形態として優勢になるのは、ざっと計算して16世紀の半ばから18世紀の最後の3分の1期まで続く本来のマニュファクチュア時代のことである。

マニュファクチュアは二重の仕方で発生する。

- (1) ある一つの生産物が完成するまでにその手を通らなければならないいろいろな種類の独立手工業の労働者たちが、同じ資本家の指揮の下にある一つの作業場に結合される。そこで彼らは互いに助け合いながら同時に労働する。当初は協業であったものが、やがて非独立化され一面化されて、一つの同じ商品お生産過程で互いに補足し合う部分作業でしかなくなる。これらの作業のそれぞれが一人の労働者の専有機能に結晶して、それらの全体がこれら部分労働者の結合対によって行われるようになる。(例:馬車マニュファクチュアの例など)
- (2) 多数の手工業者が同じ資本家によって同じ時に同じ作業場で働かされる。かなり大量の完成商品を一定期間に供給する必要があるとしよう。そのために、労働が分割されることになる。いろいろな作業を同じ手工業者に時間的に順々に行わせることをやめて、それらの作業を互いに引き離し、孤立させ、空間的に並べ、それぞれの作業を別々の手工業者に割り当て、すべての作業が一緒に協業者によって同時に行われるようにする。

第2節 部分労働者とその道具

マニュファクチュアは、細部労働者(部分労働者)の老練を生み出し、労働の生産力を高める。

労働の生産性は、労働者の技量にかかっているだけでなく、彼の道具の完全さにもかかっているが、マニュファクチュアによる部分労働への分化は、それに適した労働用具の分化、専門化をもたらし、労働用具を単純化し、改良し、多種類にする。

それは単純な諸道具の結合から成り立つ(次の時代の)機械の物質的諸条件の一つを作り出す。

第3節 マニュファクチュアの二つの基本形態 ———— 異種のマニュファクチュアと有機的マニュファクチュア

異種のマニュファクチュア

独立の部分生産物の単に機械的な組み立てによって作られる。(例:時計製造)

有機的マニュファクチュア

相互に関連のある一連の諸過程や諸操作によって製品を(流れ作業的に)生産するもので、労働の連続性や一様性、規則性、秩序が、ことに労働の強度が生み出される。(例:縫針マニュファクチュア)

第4節 マニュファクチュアの中での分業と社会の中での分業

マニュファクチュアの中での分業(マニュファクチュア的分業): いろいろな労働力が資本家に売られて、資本家の下で部分労働をし、結合労働力として使用されるが、その作業場内では商品交換されず、その最終生産物が始めて商品となる。

社会の中での分業(社会的分業): 互いに独立した多数の商品生産者間への生産手段の分散を前提にしている、その生産物の商品交換によって媒介される。

一般的分業: 農業や工業などという大きな書部門への社会的生産の分割

特殊的分業: これらの生産部門の種や亜種への区分

個別的分業: 一つの作業場の中での分業

自然発生的分業: 性の区分や年齢の相違なの野純粹に生理的な基礎の上での分業

資本主義的生産様式の社会では、社会的分業の無政府性とマニュファクチュア的分業の専制とが互いに条件となり合う。

第5節 マニュファクチュアの資本主義的性格

本来のマニュファクチュアは、個々人の労働様式を根底から変革させ、労働者をゆがめて一つの奇形物にしてしまう。もろもろの生産的な本能と素質との一世界をなしている人間を抑圧することによって、労働者の細部的技能を温室的に助成するからである。個人そのものが分割されて一つの部分労働の自動装置に転化される。マニュファクチュア労働者は、その自然的性質からも独立なものを作ることができなくなっているのもはやただ資本家の作業場の付属物として生産的活動力を発揮するだけである。

マニュファクチュア的分業は、手工業的活動の分解、労働用具の専門化、部分労働者の形成、一つの全体機構の中での彼らの組分けと組合わせによって、いくつもの社会的生産過程の質的編制と量適否冷静、つまり一定の社会的労働の組織を作り出し、どうじにまた労働の新たな社会的生産力を発展させる。社会的生産過程の資本主義的形態としては、マニュファクチュア的分業は、ただ、相対的剰余価値を生み出すための、または資本お価値増殖を労働者の犠牲において高めるための、一つの特殊な方法でしかない。それは、労働の社会的生産力を、労働者のためにではなく資本家のために、者はしかも各個の労働者をふぐにすることによって、発展させる。それは、資本が労働を支配するための新たな諸条件を生み出す。したがってそれは、一方では歴史的進歩および社会の経済的形形成過程における必然的発展いきとして現れ、同時に他方では文明化され洗練された搾取の一方法として現れるのである。

マニュファクチュアは、労働者の等級的編制を作り出すと同時に熟練労働者と不熟練労働者との簡単な区分を作り出すとはいえ、不熟練労働者の数は、熟練労働者の優勢によって、やはりまだ非常に制限されている。

マニュファクチュアは、社会的生産をその全範囲にわたってとらえることも、それを根底から変革することもできなかった。マニュファクチュアは年の手工業と農村の家内工業という幅広い土台の上に経済的な作品としてそびえたった。マニュファクチュア自身の狭い技術的木曾は、一定の発展度に達したとき、マニュファクチュア自身によって作り出された生産上の諸要求と矛盾するようになった。

マニュファクチュア的分業の産物として生み出された機会は、社会的生産の規制原理として的手工業的活動を廃棄する。